

国立民族学博物館研究報告別冊 no.012; はしがき

著者	和田 正平, Wada Shohei, ワダ ショウヘイ
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	012
ページ	v-xi
発行年	1990-03-30
その他のタイトル	Introduction
URL	http://hdl.handle.net/10502/3546

は し が き

本書は、1985年から1987年にかけて行なわれた国立民族学博物館の共同研究「アフリカ諸民族の技術誌の整理と分析」の成果の一部として、また、1987年に出版された『アフリカ 民族学的研究』一第2部 生活技術一-の続編として編纂されたものである。

この共同研究会は、1974年、国立民族学博物館が創設され、1977年、開館を間近かにひかえて展示準備を開始した頃に、すでに問題意識として発足の萌芽があった。博物館として一般公開される展示標本は言うまでもなく、収集収蔵されている全標本資料に民族誌的な学術情報が必要であり、情報カードを完成し、各種解説を書くためには民族技術に関する共同研究を行なうことが急務であった。ただ、開館当初は、まだ集積された標本資料も少なく、本格的な共同研究を開始するには材料が不足であった。しかし、『国立民族学博物館総合案内』の展示解説や『月刊みんぱく』の表紙を飾っている標本資料の紹介（創刊号1977年10月～1990年2月までで通巻149号を数える）などに見られるように、本館の研究活動は「もの」との関係抜きにして成立しない。1978年より隔年4次にわたって国立民族学博物館を中心に実施された「熱帯アフリカにおける物質文化の比較民族誌的調査」（代表者 和田正平）は、アフリカ民族技術に関してファースト・ハンドのデータを収集する必要から計画された。西欧諸国が大航海時代からアフリカ諸民族と接触し、やがて軍隊等が内陸へ侵攻、植民地支配を確立した後は、本格的に民族誌を発達させ、標本資料の収集と搬出を行なったのに対し、日本におけるアフリカ諸文化の収集調査はほとんどがアフリカ諸国の独立以降に限られており、標本資料の蓄積度に大きな較差がある。またこうした歴史的関わりの薄さに加えて、アフリカの民族技術は民族学プロパーの研究テーマとして採り上げられることが少なく、『アフリカ研究』第25号、特集「日本におけるアフリカ研究の回顧と展望」（1984年）のなかで指摘されているように、アフリカ研究のなかでもっとも遅れているジャンルである。

しかし日本のアフリカ研究が開始されて20数年、各大学や研究機関等による海外学術調査をとおして、毎年確実にファースト・ハンドの民族学資料が集積され、その後1975年には、国立民族学博物館の海外標本資料収集調査も始まり、アフリカの標本資料の質的量的な拡充も目に見えて達成されてきた。その結果、民族技術に関してもか

なりな程度 of 原資料を提示することが可能になったのである。

そこでこの共同研究会では、最近10年間、サハラ以南の黒アフリカ諸国において各々がフィールド・ワークで獲得した民族誌的諸資料を整理分析し、伝統技術がどのように継承されてきたのか、またその革新と変容がどのように行なわれてきたのか、などについて焦点をしばって討論を行なってきた。討論の成果は一部『国立民族学博物館研究報告』や『アフリカ研究』等の学会誌に投稿されたが、今回、特に民族技術プロパーな論文を中心に共同研究の成果をとりまとめ、『国立民族学博物館研究報告別冊』として刊行することにした。収録されている論文は計15編で東部アフリカ、中部アフリカ、西部アフリカ、各5編づつから構成されている。

東部アフリカとは通常、ケニア、ウガンダ、タンザニアの3か国を中心にルワンダ、ブルンジを合わせた5か国をさしているが、東アフリカ牛牧文化領域として考えると、スーダン南部やザンビア、そしてエチオピア、ソマリアの一部等を含めて考えていくほうが有効である。ザンビアのチェワ族を扱った吉田論文を東部アフリカに含めたのはそうした考え方によっている。

ついで、中部アフリカとは、ザイール、カメルーン、中央アフリカ、コンゴ、ガボン、赤道ギニアなどをさしているが、日本で本格的なフィールド・ワークを実施しているのはザイールとカメルーンの両国で、中央アフリカ、ガボン、コンゴは予察が行なわれている程度である。本書に収録されている諸論文もこの両国に限られる。

また、西部アフリカとは、サヘルに接するセネガル、マリ、ニジェール、チャドと、ギニア湾に面するガンビア、ギニア・ビサウ、ギニア、シエラレオネ、リベリア、象牙海岸、ガーナ、トーゴ、ベニン、ナイジェリアなどを包括してさす場合が多い。モーリタニアを西部アフリカに含める見方もあるが、民族学的にはセネガル河の北は白アフリカであり、除外したほうがサハラ以前の地理的区分が明瞭になる。

以上、本書の構成に明らかなとおり、日本のアフリカ研究も地理的に広く、オールラウンドにわたるようになったが、それでもアフリカ60数か国すべてを網羅しているわけではない。南部アフリカ諸国はアパルトヘイト政策に反対する立場からカラハリ砂漠の狩猟民の研究を除いて、日本のフィールド・ワークはほとんど行なわれていない。その他、最近まで内戦状態にあった国や現に政情不安やインフレ等で国内が混乱している国も多く、アフリカにはなお政治的、経済的そしてイデオロギー的に研究できない国が数多く残されている。しかし、それにもかかわらず、本書が広範囲にわたってアフリカ地域をカバーする構成をとれたことは、われわれの研究の一つの前進であったと考えられる。ただし、共同研究において十分に討論の一致をみしていないのが

民族技術のジャンルの問題である。冒頭にも述べたように、民族学からすれば、民族技術は中心からはずれた周辺テーマであり、専門的にはジャンルもあいまいで、方法論も確立しているわけではない。たいがい必要に応じて技術誌を記録してきたという研究が多い。それだけに個人的な興味に応じて散発的に資料が収集されてきたといっても過言ではなく、民族技術の学問的確立はまだしもの感が深い。それはまた、このジャンルが技術を駆使できるものでなければ完全に記録することが難しく、専門家もなかなか出現しなかったからである。

しかし、この共同研究会は技術誌への関心と認識を高め、民族技術の専門家もアフリカ研究に参加する大きな機縁をつくった。そのぶん、民族学プロパーのフィールド・ワーカーも刺激を受け、技術誌の記録も綿密になり、研究の幅も広がった。本書はそうしたアフリカにおける民族技術の研究をさらにもう一步前進させる期待をこめて編集された。

さて、そこでつぎに、本書に収録された各論文について簡単に内容を紹介し、アフリカ研究上の意味について編者の私見を述べておきたい。

まず、一般的に言えば、独立後、新興アフリカ諸国は一律に近代国家の建設を目標に政治、経済、社会の諸改革を推進してきた。国により採られた政策は様々であるが、今その成果が問われている。そのうち、東部アフリカでは、資本主義に従ったケニアと社会主義路線を取ったタンザニアの両国にわが国の関心が集中している。

ケニア国で民族学調査を行なっている大森元吉は、最近、発展途上国ではどこでも問題にされているインフラストラクチャーの整備を取り上げ、ケニアの国家財政が基幹産業や中枢施設の充実に投入される反面、調査地である西ケニア、カブラス部、北カブラス村のような僻地では、開発投資の恩恵を受ける割合が少なく、生活基礎施設の改善がほとんど住民の自助努力に負っているという事実を指摘し、またしかし、そうした個別的な微少な能力（可能性）と資本の集積が地域住民の生活向上をもたらすとハランベ（集団協力）効果について言及している。

また、タンザニアで生態学手法を用いて調査を行なっている栗田和明は、ザンビアとの国境に近い南部地方のムベア県、パカティ地区、ルイファ村において、P・H・ガリバーなどの先駆的業績のなかで報告されているニャキュウサ族の土地不足の実態を検討している。M・ウィルソンによると、ニャキュウサ族は土地不足から伝統的な年齢村を解消したと一般化されているが、それだけでは説明できない地方がある。その上、独立後、タンザニアでは早期に土地の国有化が実施され、土地の個人所有を認められなくなったが、しかしニャキュウサ族は生産手段を有効に利用するため、様々

の方法で土地を入手し、生活と技術の革新を行なっているという。

ついで、東部アフリカで農業技術と並んで問題にされるのは家畜の管理技術である。今回、小馬徹はケニアのカレンジン系、キプシギス族の家畜分類と個体識別に関して詳細な報告を行なっている。これは、すでに1987年同じ研究テーマで公表されている太田至のトゥルカナ族の一連の諸論文と比較することを目的に提示されたものであり、家畜管理技術に関する問題の提起であると同時に、資料的には、今後東部アフリカ牧畜民社会の比較研究に大いに役立つものと思われる。

上田富士子の論文「カンバのチョンドと女性の生活」は、最近ケニアで最も人気の高い民芸品の一つ、カンバ語でチョンドと呼ばれる女性の運搬用袋物の製作過程を取り扱っている。伝統的なチョンドはバオバブの内樹皮で製作されるが、最近は毛糸やナイロン糸を材料に色彩的で模様も変化に富んだチョンドが製作されるようになった。つまり交通機関と貨幣経済の発達により、伝統的な民族技術に変化が現われ始めたのである。

また、動植物利用の重要な側面として「薬」の世界がある。吉田憲司は邪術や病に対抗する実践的、技術的な手段として、薬の問題を取り上げている。医療（広義）に利用される動植物の種類はひじょうに多様で、用途も多岐にわたっているが、彼は綿密な記載により、医療人類学に役立つ基礎的なデータを提供している。

中部アフリカでは収録された5論文すべてが王権社会を取り扱っている。王権社会はひとくちに言えば、神聖王や最高首長を頂点にしたピラミッド型の階層秩序によって構成されている。王は王権を象徴する神器を継承し、ときにそれを体現する。そのひとつが衣装である。渡辺公三はザイール中央部、クバ王国（ブショング）において調査を実施し、王の衣装の頂点に位置するブワンシィ（bwaancy）について考察している。クバの衣装は王権体系におけるグレードに応じて下位になるほどシンプルになる。西欧では民族芸術の観点からクバ王国のラフィア織布に関する関心は高いが、渡辺が問題にしているのは、王の可視の身体と隠された身体を中心に分節化されたクバの王権が、衣装をどのような装置として用いることで成り立っているか、を明らかにすることにある。

クバ王国においては現在も伝統的な製作技法によって草ビロードが製作されている。そうしたラフィア染織の技法に関しては、井関和代が微細な工程をあまさず記載しており、中・西部アフリカにおける染織技術の比較研究に重要な資料を提供している。これほど専門的な染織の記載は欧米でもめったに見られないように思う。

ところで、裸体で生活できる熱帯アフリカにおいてなぜ染織技術や着服の習慣が広

まったのであろうか。嶋田義仁はイスラム教の拡大がアフリカに衣服文化を発展させたと主張する。この所説自体は決して新しいとは言えないが、西アフリカ内陸部に勃興したイスラム王国や首長国の政治的な支配体制のなかで、衣服給付が基本的な重要性を持っていたことを様々な角度から検証している。そして中央スーダン地方では衣服や布は貨幣として流通し、宝貝よりも重要な役割を果たしてきたという。嶋田にしたがうなら、アフリカにおける裸族文化から衣服文化へ向かう変容過程は、イスラム・衣服文化複合としてとらえられるのであり、王権国家の形成と不可分である。言いかえると、王の身体は王権を象徴する多彩な衣装で包まれており、いかなる場面においても「裸の王様」などはありえない。衣服は王権社会の全体構造に組み込まれた必須な物的装置なのである。

しかし、その根底にイスラム化以前のアフリカ土着社会が存在していることも忘れてはならない。王権社会におけるイスラム教的支配原理も実はパレオ・アフリカ文化の上に成立しているのである。和崎春日の論文「バムン王権社会のヤシ文化複合」は、そうしたアフリカ土着生活において非常に重要性をもっていた油ヤシやラフィア・ヤシが、イスラム教が導入されて、王権社会が成立すると、その政治制度と不可分にむすびついて王国全体に複合する生産物になったという、きわめて興味深い問題を取りあげている。たとえば2種類のヤシはヤシ酒やヤシ油に加工されたのち割礼式や結婚式等の重要な通過儀礼に使用されているが、実はアルコール類はイスラム教で禁止されている飲み物であり、飲用は戒律に反する。にもかかわらず、ヤシ酒だけは特別扱いである。バムン王国においてはヤシ酒は特に「国の酒」と呼ばれ、王位継承儀礼にはなくてはならない飲料として使用されている。王から順次民衆にいたるどのレベルにおいてもヤシは「力」と「神聖性」を具象する絶対的な文化として信じられているのであり、王権を強化する物的装置になっている。

ところで、こうした神聖王はどうぜん政治的中心として首邑をつくり、周囲の村落を統合して自己領域を確定した。北カメルーン・アダマワ高原においてブーム族のバングブーム村を調査した日野舜也は、屋敷（キラ）、村、そして周辺地域の空間配置を細大漏らさず記述し、ブーム王権社会の空間構造を明らかにしている。これは川田順造のオートボルタ（現ブルキナ・ファソ）のモシ族の王都の研究と比較するとき、その空間構造の特徴がより一層鮮明にあらわれてくるように思われる。

西部アフリカでは、竹沢尚一郎が西アフリカの物質文化に与えたイスラムの影響として特に、1) 稲、2) コーラナッツ、3) 綿と毛、4) しばり舟の4項目を取り上げ、史的考察を行なっている。同時に、彼はこの論文において、歴史資料としての物

質文化の有効性を検討しており、かなり肯定的な結論に達したようである。しかし、西部アフリカの物質文化も4項目だけでは不十分であり、彼自身が提言しているように、今後の研究において取り上げる項目をふやしていくことが必要である。そのなかでも、たとえば鉄、宝貝、金などが残された検討項目として挙げられている。いずれこれらの文化項目にも竹沢は研究を進めるものと思われるが、次の和田正平の論文「トーゴ北部諸族の鍛冶師と鉄製品」もこうした西部アフリカの物質文化を包括的に取り扱う彼の研究に有効な民族誌資料が含まれていると思われる。

言うまでもなく鉄は硬く、武器や農具等の刃物類の製作には最高の原料であり、利用価値が高い。今回、和田によって報告されているトーゴ北部諸族の鉄製品は、バッサリ産の良質な鉄を使って伝統的に製作されたものであり、バレオニグリティック山地民の鉄文化の特徴を裏付ける民族誌資料として提示されていたものである。西部アフリカでは18世紀から19世紀後半にかけてローカルな鉄生産は消滅していったが、和田が調査している北部トーゴでは20世紀初頭まで鉄がさかんに生産されていて、各地の需要を満たしていたのである。

ところで、バッサリ産の鉄はトーゴ、ガーナにとどまらず、イスラム化したハウサ商人によってはカナイジェリア北部まで運ばれていった。ハウサ族は活動範囲が広く、長距離交易路に沿った西アフリカ諸都市ならどこにでも住んでいて、商業に従事している。特にゾンゴと呼ばれるイスラム教徒の集落や街区にはハウサ語を話す人びとが多く常住している。松下周二の「ハウサ語建築関係語彙」はハウサ的建築物に関する関係語彙を集めた、いわば語彙集であるが、ハウサが西アフリカの建築技術に与えた影響を推測する有効な言語学資料になっている。

このように西部アフリカでは、イスラム教の影響が大きく諸族の生活を支配し、アフリカ土着文化をおおっているが、トーゴ北部、アタコラ山地に居住するグルマ語系（ボルタ系）、テム語系諸族は、逆にイスラム教にはほとんど関係なく生活しているのが特徴である。武田淳が調査したランバ族もその一つで、食物をめぐる技術体系は伝統的な農牧生活を基本に成立していて、野生植物の利用の仕方や料理法はスーダン・サバンナ農耕の原形形態をそのまま残存しているように見える。

ここでスーダン農耕といえば、言うまでもなく主要穀物はトウジンビエ、ソルガム、フォニオ等である。このうちソルガムは主食として料理されるよりも、むしろ地酒として消費される量のほうがはるかに多い。極端な場合には地酒をつくるためにソルガムを栽培している地方さえある。儀礼に地酒は欠かせないだけでなく、市場へ運び、商品として販売すれば大きな利益が上げられるからである。北部トーゴ・ダパンゴ市

において土器造りを調査していた森淳は、土器が地酒の醸造、販売、飲酒等の必需品として大量に生産されていると述べ、総計 170 個の大型かめを順番に使用して生産する大規模な地酒醸造法を明らかにしている。この地方では、地酒造りと土器製作が緊密に結びついて発達してきたのである。

以上で本書の構成と内容の紹介を終えるが、アフリカ民族技術の研究は、本格的に開始されて10年に満たず、データが不十分であり、今後に多くの課題を残している。近い将来、再度現地調査を実施し、もう一度このテーマに接近したいと考えている。

3月3日

編 者